

**研究拠点形成事業**  
**平成 29 年度 実施報告書**  
**B. アジア・アフリカ学術基盤形成型**

**1. 拠点機関**

日本側拠点機関：	聖路加国際大学
タンザニア拠点機関：	ムヒンビリ健康科学大学
インドネシア拠点機関：	国立イスラム大学

**2. 研究交流課題名**

(和文)：アジア・アフリカ圏の妊産婦・新生児死亡率減少のための助産人材育成モデルの開発  
(交流分野： 母性看護・助産学 )

(英文)：Development of midwifery personnel training model for maternal and newborn mortality reduction in Asia and Africa

(交流分野： Maternal Infant Nursing & Midwifery)

研究交流課題に係るホームページ：

<http://university.luke.ac.jp/about/project/aamrc/about.html>

**3. 採用期間**

平成 27 年 4 月 1 日 ～ 平成 30 年 3 月 31 日

( 3 年度目 )

**4. 実施体制****日本側実施組織**

拠点機関：聖路加国際大学

実施組織代表者（所属部局・職・氏名）：学長・福井 次矢

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：大学院看護学研究科・教授・堀内 成子

協力機関：毛利助産院

事務組織：聖路加国際大学事務局

**相手国側実施組織**（拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。）

(1) 国名：タンザニア

拠点機関：(英文) Muhimbili University of Health and Allied Sciences (MUHAS)

(和文) ムヒンビリ健康科学大学

コーディネーター（所属部局・職・氏名）：

(英文) School of Nursing・Senior Lecturer・Sebalda LESHABARI

協力機関：(英文) Tanzania Midwives Association、Muhimbili National Hospital

(和文) タンザニア助産協会、ムヒンビリ国立病院

(2) 国名：インドネシア

拠点機関：(英文) Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah

(和文) 国立イスラム大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：

(英文) School of Nursing・Lecturer・Yenita AGUS

協力機関：(英文) World Health Organization Country Office in Indonesia

(和文) 世界保健機関インドネシア事務所

## 5. 研究交流目標

### 5-1. 全期間を通じた研究交流目標

#### 1. アジア・アフリカの現場で希求されている助産人材の育成モデルの開発

本研究交流事業の前身では、3年間(平成23-25年度)のアジア・アフリカ学術基盤形成事業を通じ、タンザニア国内初の助産学修士課程の設立に成功した。設立前の教育セミナーを通じ、現地の助産師が、自らの知識・技術向上に対し高い意欲を持っているにもかかわらず、学びの場が限られていることが判明した(Shimpuku et al., 2012; Shimpuku et al., 2013)。高い妊産婦死亡率、新生児死亡率減少の鍵を握る助産師・看護師の育成のための教育をタンザニアでの研究を基盤として、インドネシアに発展・展開し、自国で持続的にその育成が可能なモデルを開発することが、本研究交流の目標である。

#### 2. 国際保健人材の強化のエビデンスを示す助産研究拠点の形成

外務省は、2013年5月に国際保健を日本外交の重要課題と位置づけ、国際保健分野において日本人の果たす役割の拡大を戦略目標に掲げ、人材育成をその具体的施策の一つとしている。大学院において助産の教育研究を行う我が国の特徴は、臨床・教育・研究が連携・循環している点にある。本研究交流は、3年間で基盤を形成した戦略をタンザニアからインドネシアに発展させるものであり、資格を得た後に生涯に渡って専門職教育という長期的視点を持った助産教育研究を日本型モデルとして世界に発信する拠点を形成する。

#### 3. 母子保健関連目標の達成に貢献する助産職のキャリア開発と評価

2015年に期限を迎えたミレニアム開発目標(MDGs)のうち、母子保健関連目標は達成の遅れが指摘されている。特に妊産婦死亡、新生児死亡を減少させるには、周産期医療へのアクセスと質の改善が急務である。タンザニアでは約半数が未だ出産時に専門の技能を持つ分娩助産者(Skilled Birth Attendant : SBA)にアクセスできておらず、インドネシアでは、出産時のSBAへのアクセスにおける地域間や集団格差が問題である。その要因として医療の質の問題が指摘されている。医療者は膨大な数の患者対応に追われており、妊産

婦は医療機関で満身にケアが提供されず、信頼関係が築けないことから、次のアクセスを控えることが両国で報告されている(Agus, 2012; McMahan, 2014)。病院には出産中に重篤な状況に陥ってから搬送される場合が多く、多くの母児が遷延分娩、産後出血、新生児蘇生の遅延など、日本であれば救命の可能性のある状況で死に至っている。その要因として医療者不足、教育者不足ばかりが指摘されているが、助産職のキャリア開発に関する研究はほとんど行われておらず、国や地域毎に役割が異なる助産師の実践能力をグローバルに強化するしくみづくりが不可欠である。本研究交流では、母子保健分野の主な担い手である助産職への教育評価を、最終的に医療の受け手である女性と子どもの成果指標である妊産婦死亡、新生児死亡の減少として研究で示すことを目指すものである。

## 5-2. 平成29年度研究交流目標

### <研究協力体制の構築>

タンザニアでは、これまでに構築した関係性を基盤に、29年度幅広く研究プロジェクトを展開する。R-1は実施した妊娠期ケアの介入研究の結果に基づき、妊婦自身の語りを促す教育介入に展開するための調査を実施する。29年度に新たに実施するR-5は、R-1で開発した妊娠期教材をベースに、若年妊娠した少女へのケアに特化した妊娠期ケアを開発し、介入研究を行う。R-2は分娩期ケアの実態調査を論文に出版する。R-4では28年度実施したS-1の新生児ケアセミナーをタンザニアに展開し、そのプロセスをアクションリサーチとする。R-6では、新生児死亡リスクの高い低出生体重児に適切な看護ケアが行われたかどうか、母親が受けた母乳育児に関する教育が母親の行動にどのように繋がっているか、母乳育児行動と児の発達と予後についての実態調査を行う。これまでに築かれた研究協力体制が、母子の健康を包括的に改善する研究教育拠点として、合同調査を行う。

インドネシアでは、28年度に育成したファシリテーターを中心に、S-2で新生児ケアセミナーを実施する。28年度実施したR-3とS-3の成果は、インドネシア研究者と共に論文にまとめ発表していく。

### <学術的観点>

タンザニアでは、28年度から行っているR-1の論文投稿を出版につなげ、妊娠期ケアの質を改善する医療者の継続教育について国際的に公表する。R-2もタンザニアにおける分娩期ケアの改善に向けた助産師自身のケア評価としての研究を国際学術誌に投稿する。R-4、R-5、R-6で新たに取り組む教育プログラムや実態調査も、論文にまとめる。

インドネシアでは、インドネシアの助産師のニーズに基づいた28年度S-2の教育介入について、その効果を発表する。28年度に三ヶ国で実施した新生児ケアのセミナー成果も、論文にまとめ公表する。助産研究拠点期間として、最終年度にこれまでの成果を多く公表する計画である。

### <若手研究者育成>

研究者交流は、日本側拠点の大学院生のタンザニア派遣を継続し、現地の大学院生や研

研究者との交流を通し、国際共同研究の実際を学ぶ機会とする。R-1、R-2 はそれぞれ参画した大学院生が論文を発表する段階にあり、R-4、R-6 も、参加する日本側大学院生がそのデータを用いてそれぞれ修士論文にまとめる機会を提供する。また、それぞれにリサーチアシスタントとしてタンザニア側拠点から若手研究者を参画させる。R-5 は、タンザニア側拠点機関から日本側拠点機関に留学中の博士課程の大学院生が参画し、タンザニア研究者を中心とした国際共同研究を展開する。

インドネシア側では、28 年度のセミナーや研究に参画した大学院生が教育効果を論文化することに加え、インドネシア側若手研究者も、共同研究を論文に発表していく。

#### <その他（社会貢献や独自の目的等）>

本事業による社会貢献、また独自の目的として、臨床への還元を掲げている。29 年度も、すべての研究事業は現場の助産ケアの改善に還元できる内容となっている。直接的には、S-1 として新生児ケアセミナーをタンザニアに展開し、コーチングの概念に基づいた寄り添いのサポートで、現場の実践能力の向上を行う。インドネシア側も S-2 として新生児ケアセミナーを実施することで、臨床でケアを行う看護師、助産師のケアを改善する。両国とも、WHO のプログラムである Early Essential Newborn Care の教材を使用するため、開発者である WHO 西太平洋事務局の Howard Sobel 氏を協力者に加え、WHO との連携体制を強める。

WHO との協働の一環として、日本の助産ケアに関する動画を作成し、タンザニアやインドネシアでのセミナーで教材として使用する。助産ケアの改善を通じた社会への貢献に加え、一般社会への発信を強めることで、拠点機関や相手国にとどまらず、一般市民への情報提供を実施する。

## 6. 平成 29 年度研究交流成果

（交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。）

### 6-1 研究協力体制の構築状況

#### <タンザニア>

これまでに構築した基盤の上で、29 年度は幅広く研究プロジェクトを展開した。R-1 は論文をまとめた上で、R-7 として教育プログラムとその効果の検証を新たに実施した。研究フィールドではタンザニアのカウンターパートに研究の調整、翻訳・通訳、データ収集補助を担ってもらった。R-2 では相手国研究者に共著者として参画させた論文が出版された。

29 年度に新たに実施した R-4 は、29 年度 S-1 と連動させ、セミナー後の相手国研究機関の医療施設における新生児ケアの知識と技術の定着をアクションリサーチで評価した。相手国研究機関のコーディネーターもスーパーバイザーとして研究の許可取得・実施に貢献した。R-5 は、R-1 の教育プログラムを若年妊娠した少女へのケアにつなげるものであったが、相手国研究機関からの博士課程への留学生が中心となり、タンザニアでのプログラム実施とその評価が実施できた。相手国研究機関のコーディネーターもスーパーバイザーとして研究の許可取得・実施に貢献した。R-6 では、相手国研究機関の医療施設における低出

生体重児のケアを記述し、開発途上国では必須とされる産後早期の完全母乳育児の継続がなされているか、中断した理由は何かを探索した。相手国研究機関の研究者もスーパーバイザーとして研究計画書の作成、許可取得に貢献した。

### <インドネシア>

28年度までに実施したニーズ調査や新生児ケアセミナーの結果を、インドネシア助産師へフィードバックすることで、他の助産師も含めた学習ニーズを知り、またそれに対する効果的な教育方法を知る機会となり、また臨床の問題点やケアの質の改善に対する視点を話し合うことにつながり、共同研究者・教育者としての信頼を高めることにつながった。

## 6-2 学術面の成果

### <タンザニア>

相手国研究者と共著の論文が3本出版につながった。うち1本はR-2の研究内容、もう2本はR-5の予備研究とその基礎研究である（論文リスト1、3、4）。現在R-1も論文の査読が進行中である。R-4、R-6は修士論文、R-5の本研究は博士論文としてまとめられ、中心となった大学院生の修了が認められた。

(修士論文)

R-4 福富理佳：Evaluation of Behavior Change of Midwives in Six Weeks After Introducing Early Essential Newborn Care at an Urban Tanzanian Healthcare Facility

R-6 多田恭子：Exploring Breastfeeding Behavior and Education of Mothers with Low-birth-weight Baby Discharged from Muhimbili National Hospital in Urban

(博士論文)

R-5 Beatrice Mwilike：An Education Program for Pregnant Adolescents Using Peers in Tanzania: A Quasi Experimental Study

### <インドネシア>

相手国研究者と共著の論文が2本出版につながった（論文リスト2、5）。うち1本は、28年度S-2の教育介入についてまとめたものである。もう1本もインドネシア側コーディネーターと協働してまとめたものであり、インドネシア側研究者のアカデミックな論文執筆の能力向上に寄与する結果となった。28年度に日本、タンザニア、インドネシアの3カ国で実施したセミナーの報告は論文がほぼ出来上がり、入稿する段階にまで至っている。

## 6-3 若手研究者育成

### <タンザニア>

計画通り、日本側拠点の大学院生、若手研究者を多くタンザニアに派遣し、研究交流活動を遂行することができた。研究者交流としては大学院生を14名タンザニアに短期派遣し、タンザニア側研究者、看護・助産大学院生らと交流する機会を持った。上記の通りR4-6は大学院の学位論研究として、大学院生を参画させる機会を持った。R-1、R-7は在学中の大

大学院生が中心に論文執筆と予備研究を進めており、R-2は今年度から教員となった若手研究者が学術雑誌の論文として出版に至る経験を持った。S-1では大学院生2名がセミナーのファシリテーターとしてタンザニアの助産師にシミュレーション教育を行う機会を得た。その成果は聖路加国際大学紀要に発表した（論文リスト6）。また、以後若手研究者がタンザニアで研究をするために必要な準備を理解できるよう、これまでの文化的理解、倫理審査、安全対策についても論文にまとめ、紀要に発表した（論文リスト7）。

### <インドネシア>

インドネシア側との共同研究R-3、セミナーS-2にも大学院生が1名参画し、大学院生や若手研究者を共著にした論文が出版に至った。S-2では大学院生、若手研究者が中心となり、セミナーの進行を補助した。セミナーの開催においては、インドネシア側研究者が中心となり二つの臨床フィールドから参加者を募り、セミナーの運営では、技術演習やその後のフィードバック討論をリードする役割を担った。

## 6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

### <タンザニア>

本事業による社会貢献、また独自の目的として、臨床への還元を掲げている。すべての研究事業が助産ケアの改善に還元できる内容であるが、特にS-1の新生児ケアセミナーとR-4の新生児ケア改善のための行動変容を促すアクションリサーチでは、セミナーを1回行っただけでは変わらない現場のケアの内容を、セミナー後6週間フォローし、セミナーを受けたスタッフが受けていないスタッフに技術移転をするなど、現場の実践能力の向上につながった。セミナーでのモチベーションを高めるため、世界保健機関(WHO)の推奨する早期必須新生児ケアの重要性を日本とタンザニアの専門家が語る動画をWHOと共同制作した。動画は8月に若手研究者が派遣されたベトナムでのWHOの2年毎評価会議で発表され、聖路加国際大学の貢献が賞賛された。

### <インドネシア>

インドネシア側では、28年度にパイロットとして一部を実施した新生児ケアセミナーを、よりインドネシア側参加者のニーズを重視した内容をカバーし、セミナー運営方法を改善した。インドネシア側のセミナー運営の難しさは、英語で直接コミュニケーションをとることのできない看護師、助産師が多いため、28年度は日本語、英語からインドネシア語の通訳を入れていたことから、時間がかかり、参加者が新たな技術への集中がしづらかったことがある。29年度は日本語からインドネシア語の直接通訳を依頼し、また同じアジア圏ですでに実施されているEENCの実際をみるという、WHOとの共同制作した動画教材を効果的に取り入れた。その結果、参加者の動機付けも高まり、スムーズなセミナー運営が実施でき、臨床への還元に至る研究交流活動となったと言える。

## <オンライン公開成果物>

### 学術論文

- Shimoda, K., Horiuchi, S., Leshabari, S., Shimpuku, Y. Midwives' respect and disrespect of women during facility-based childbirth in urban Tanzania: a qualitative study. *Reproductive Health*. 2018; 15(1) 8. doi: 10.1186/s12978-017-0447-6
- Nagamatsu, Y., Tanaka, R., Oka, M., Maruyama, N., Agus, Y., Horiuchi, S. Identifying clinical and educational difficulties of midwives in an Indonesian government hospital maternity ward: Towards improving childbirth care, *Journal of Nursing Education and Practice* 7(11) 7-13 Jun. 2017, DOI: <https://doi.org/10.5430/jnep.v7n11p7>
- Agus, Y., Horiuchi, S., Iida, M. Women's choice of maternal healthcare in Parung, West Java, Indonesia: Midwife versus traditional birth attendant, *Women and Birth*, DOI: <https://doi.org/10.1016/j.wombi.2018.01.007>
- Mwilike, B., Shimoda, K., Oka, M., Leshabari, S., Shimpuku, Y., Horiuchi, S. A Feasibility Study of an Educational Program on Obstetric Danger Signs among Pregnant Adolescents in Tanzania: A mixed-methods Study, *International Journal of Africa Nursing Sciences*. 2018;8:33-43. DOI 10.1016/j.ijans.2018.02.004
- Mwilike, B., Nalwadda, G., Kagawa, M., Malima, K., Mselle L., Horiuchi, S. Knowledge of danger signs during pregnancy and subsequent healthcare seeking actions among women in Urban Tanzania: a cross-sectional study, *BMC Pregnancy and Childbirth*. 2018;18:4 DOI 10.1186/s12884-017-1628-6

### ホームページ

- 世界保健機関 西太平洋地域事務局

First Embrace: The universal first act of love

[https://www.youtube.com/watch?v=\\_8T2ePCty4E](https://www.youtube.com/watch?v=_8T2ePCty4E)

- 聖路加国際大学 Early Essential Newborn Care 英語版

<https://www.youtube.com/watch?v=8zYERXMG6eE>

- 聖路加国際大学 Early Essential Newborn Care 日本語版

<https://www.youtube.com/watch?v=F00TIPpCelE>

## 6-5 今後の課題・問題点

### <タンザニア>

タンザニアでは、研究交流体制が構築されていること、長期派遣、短期派遣で大学院生

や教員が1年を通して行き来していることで、コミュニケーションが円滑に量れ、特に大きな課題・問題点はなく進行している。研究を始める際に、倫理審査のプロセスが長く、時間が掛かることはあるが、国の規定に沿って研究調整を進めている。

### <インドネシア>

6-4に記載した通り、言語の問題があったが、教材や通訳者を工夫することで、29年度のS-2は滞りなく進行した。今後も今回のように日本語とインドネシア語で通訳できる者を採用したい。

#### 6-6 本研究交流事業により発表された論文等

- |                               |    |
|-------------------------------|----|
| (1) 平成29年度に学術雑誌等に発表した論文・著書    | 9本 |
| うち、相手国参加研究者との共著               | 5本 |
| (2) 平成29年度の国際会議における発表         | 0件 |
| うち、相手国参加研究者との共同発表             | 0件 |
| (3) 平成29年度の国内学会・シンポジウム等における発表 | 6件 |
| うち、相手国参加研究者との共同発表             | 2件 |

## 7. 平成29年度研究交流実績状況

### 7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成27年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	<p>(和文) タンザニア農村部の助産師・看護師を対象とした、出産準備カウンセリング教育プログラムによる知識と技術の向上</p> <p>(英文) Improve Health Worker's Knowledge and Skills by Education Program of job aid Supported Counseling for Birth Preparedness and Complication Readiness (BP/CR) in Rural Tanzania</p>				
日本側代表者 氏名・所属・職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer</p>				
29年度の研究 交流活動	<p>28年度までに実施した看護師・助産師を対象とした妊婦健診での出産準備教育カウンセリングの技術の向上に関する教育プログラムの実施と評価を通し、助産師のカウンセリング技術の知識と技術の向上を認めることができた。この先助産師のカウンセリングの効果を高めるためには、妊婦健診の場で、妊婦が自身の健康状況や出産準備に対する状況を語ることをサポートする必要性が示された。その為、本年度は、タンザニア農村部の妊婦健診での妊婦の会話の実態調査と、妊婦グループによる会話促進プログラムの開発と評価を実施した。さらに R-1 はこれまでの調査結果を英語論文として学術誌に発表した。また、これまでの調査を踏まえて現地のニーズに合った教育方法に改善を加えて、コントロール群を有する新しい調査を R-7 として実施した。</p>				
29年度の研究 交流活動から得 られた成果	<p>28年度までに実施した調査結果をタンザニア側カウンターパートとの共同で論文にまとめ、学会誌に投稿し査読審査を受けている段階である。論文投稿により、開発した教材による助産師の妊婦健診中のコミュニケーションの改善の効果を国際母子保健関連研究者に周知することができる。</p>				

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 27 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	<p>(和文) タンザニアにおける施設分娩時の助産師から女性への軽蔑と虐待の実態調査</p> <p>(英文) Survey on Disrespect and Abuse during Childbirth in Tanzania</p>				
日本側代表者 氏名・所属・職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer</p>				
29年度の研究 交流活動	<p>28年度は、施設分娩における助産師から女性への軽蔑と虐待の実態を探るため、助産師を対象にした質問紙調査を実施した。その結果、先行研究の女性側の報告と同様、一定の割合で女性へ軽蔑的なケアや虐待が実施されているという結果が見受けられ、また助産師の労働環境・システムがそれらの行動に関連していることが明らかとなった。今年度は、これらの結果を国際学術誌へ投稿し、査読結果への対応を共同研究者間の討議を通じて行った。今後、分娩期の実際の行動と労働環境との関連が示唆されていることをタンザニアの協力施設へ報告およびフィードバックすることを計画した。</p>				
29年度の研究 交流活動から得 られた成果	<p>タンザニア助産師自身からの報告として、その実態調査を公表することは、タンザニア政府への保健分野における政策提言への示唆となることが期待される。また他の類似した状況の国におけるケアの質改善への情報提供となることも期待される。本年度は、タンザニア助産師が実際に施設にて女性に対して実施していた Disrespect and Abuse(軽蔑と虐待)について論文を国際学術誌に投稿し、結果の公表に至った。結果の公表に至るまでの論文執筆および査読への回答のプロセスにおいて、相手国側の参加研究者とともにその内容を検討し、修正を重ねていった。以下が該当の論文である。</p> <p>Shimoda K, Horiuchi S, Leshabari S, Shimpuku Y. Midwives' respect and disrespect of women during facility-based childbirth in urban Tanzania: a qualitative study. <i>Reproductive Health</i>. 2018; 15(1) 8. doi: 10.1186/s12978-017-0447-6</p>				

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 27 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	<p>(和文) インドネシアの現任教育における助産師の学習ニーズ調査</p> <p>(英文) Learning needs survey on midwifery in-service training in Indonesia</p>				
日本側代表者 氏名・所属・職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・職	<p>(英文) Yenita AGUS, Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah, School of Nursing, Lecturer</p>				
29年度の研 究交流活動	<p>28年度の調査で、学習ニーズとして、出産直後の早期 Skin-to-skin care に関する学習ニーズが挙げられた。そのため本年度 S-2 として、その教育セミナーを実施した。その実施の様子と教育介入前後での評価研究も実施し、モデルを用いたシミュレーション教育の好効果が得られた。本年度は、セミナーの評価結果を分析した。</p>				
29年度の研 究交流活動から得 られた成果	<p>① 臨床の助産師たちが認識している学習ニーズ調査の論文の公表ができ、インドネシア側拠点としての学術業績となる。 Nagamatsu, Y., Tanaka, R., Oka, M., Maruyama, N., Agus, Y., Horiuchi, S. Identifying clinical and educational difficulties of midwives in an Indonesian government hospital maternity ward: Towards improving childbirth care, Journal of Nursing Education and Practice 7(11) 7-13 Jun. 2017</p> <p>② インドネシア助産師へ結果をフィードバックすることで、他の助産師も含めた学習ニーズを知り、またそれに対する効果的な教育方法を知る機会となり、また臨床の問題点やケアの質の改善に対する視点を持つことにつながった。</p> <p>③ 日本側研究者、インドネシア側コーディネーターとの共同研究も進み、妊婦健診に関する関連論文の公表に至った。 Agus, Y., Horiuchi, S., Iida, M. Women's choice of maternal healthcare in Parung, West Java, Indonesia: Midwife versus traditional birth attendant, Women and Birth, DOI: <a href="https://doi.org/10.1016/j.wombi.2018.01.007">https://doi.org/10.1016/j.wombi.2018.01.007</a></p>				

整理番号	R-4	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	<p>(和文) EENC の実践普及を目指して行う、CBPR による、助産師の行動変容に関する調査</p> <p>(英文) Behavior change of midwives for implementation and dissemination of Early Essential Newborn Care: Community-Based Participatory Research in Tanzania</p>				
日本側代表者 氏名・所属・職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer</p>				
29年度の研究 交流活動	<p>S-1 で予定している「タンザニアにおける早期必須新生児ケアセミナー (EENC)」を題材に、アクションリサーチを実施する。Behavior Change Wheel モデルを参考にした行動変容を促すための取り組みを計画し、現地助産師と協働する CBPR アプローチをもとに、タンザニア都市部の一産科病棟というコミュニティに見合う、実践が変わる支援について、参加観察・質問紙・インタビューを用いたデータ収集、分析を行った。第一にセミナー前後の実践を参加観察にて評価した。また、モチベーションや行動変容の因子について、質問紙とインタビューを用いて評価し、実践が変わる過程において、行動変容を支援するために必要な具体的な取り組みを示唆を学術論文としてまとめた。</p>				
29年度の研究 交流活動から得 られた成果	<p>① タンザニア助産師のセミナー後の新生児ケアの行動の変化： セミナー後の評価では EENC についての知識および実技の向上がみられた。しかし、セミナー直後から開始した臨床現場での参加観察においては EENC の現場での実践率が低いことがわかった。特に EENC の主要なケアである出生直後の羊水の拭き取り、skin-to-skin contact、臍帯遅延結紮、初回授乳支援については 30% 以下の実践率であった。セミナーに参加した助産師とともに現場の実践変化を目指す活動（コーチングセミナーの開催、OJT など）を行った。12 週間後の実践率の評価では、上述の主要なケアのほとんどが 50% 以上の実践率の上昇を認めた。しかし同時に、ケア前の手洗いや新生児蘇生の準備においては実践率の上昇はほとんどみられず、今後の課題となった。</p> <p>② タンザニア助産師の行動変容を促す具体的支援、および障壁となる要因：セミナー開催や OJT のような現場教育の継続がケア実践の変化をもたらすことが明らかになった。しかし、そのような現場教育を実施すること自体が困難であることも明らかとなった。その要因とし</p>				

	<p>て、スタッフ自身が主体的に行う現場教育の慣習がないこと、時間・人員の不足、効果的なチームワークの欠如等が挙げられた。また、多忙な労働環境や満たされない報酬がスタッフのモチベーション低下を招いていたことから、新たなケアを現場へ導入するには、利害関係者を含めたチームづくりと包括的アプローチが必要であることが示唆された。</p> <p>③ <b>CBPR</b> の方法を用い、タンザニア人助産師を研究プロセスに参加させることで、助産師が自らの実践をセルフモニタリングする機会となり、持続可能な実践につなげることができる：</p> <p>研究パートナーとして協力してもらうことで現場助産師自ら現場の課題に気づき、その課題に取り組む機会となったと思う。今後も現場助産師による定期的なセルフモニタリングの継続を予定しており、実践の持続可能性に期待したい。</p> <p>研究計画およびデータ収集の過程において、タンザニア側コーディネーターに指導を仰いだ。今後の継続評価についても現地調整を依頼する。</p>
--	--

整理番号	R-5	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	<p>(和文) タンザニア思春期妊婦に対する、ピア・エドゥケーターによる出産準備教育プログラムの評価</p> <p>(英文) Evaluation of an Education Program on Obstetric Danger Signs Using Peer Educators and Coping Mechanisms among Pregnant Adolescents in Tanzania: Quasi-Experimental Study</p>				
日本側代表者 氏名・所属・職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer</p>				

29年度の研究 交流活動	これまでに本事業では成人妊婦へのケア改善に関する研究を実施してきたが、タンザニアでは若年妊娠が深刻な問題として存在している。先行研究にて、思春期妊婦は同じ状況にある妊婦(ピア)からのサポートを必要としていることが示されている。また妊娠期に、妊娠期、分娩期、産褥期の危険なサインの情報を提供し、一般的に知識レベルの低い思春期妊婦が危険なサインへの気づきえられるよう教育介入が必要である。これらの背景から、タンザニアで、思春期妊婦を対象にピアサポートグループを用いた、出産準備教育プログラムを実施し、そのプログラム評価の研究活動を実施した。
29年度の研究 交流活動から得 られた成果	<p>① R-5の実施により、思春期妊婦が同じ経験をしている仲間を求めている事、ピア・メンター・マザーの必要性が明白になった。</p> <p>Mwilike, B., Shimoda, K., Oka, M., Leshabari, S., Shimpuku, Y., Horiuchi, S. A Feasibility Study of an Educational Program on Obstetric Danger Signs among Pregnant Adolescents in Tanzania: A mixed-methods Study, International Journal of Africa Nursing Sciences. 2018;8:33-43. DOI 10.1016/j.ijans.2018.02.004</p> <p>② ピア・エドゥケーターによる教育プログラムは、思春期妊婦が、経験を共有し、妊娠中の危険サインに対する知識レベルが向上した。</p> <p>③ タンザニア側拠点の教員が日本側拠点の留学生として実施する共同研究であり、タンザニアの若手研究者が日本側のスーパーバイザーの下で研究プロセスを学ぶことができた。</p> <p><u>Mwilike, B., Nalwadda, G., Kagawa, M., Malima, K., Mselle L., Horiuchi, S.</u> Knowledge of danger signs during pregnancy and subsequent healthcare seeking actions among women in Urban Tanzania: a cross-sectional study, BMC Pregnancy and Childbirth. 2018;18:4 DOI 10.1186/s12884-017-1628-6</p>

整理番号	R-6	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	(和文) 母乳育児と子どもの成長;タンザニア都市部での新生児病棟とカンガルー病棟の母乳育児指導の比較				
	(英文) Mother's breastfeeding practice and baby's growth; Comparing breastfeeding education in Neonatal and Kangaroo units in Urban Tanzania				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授				
	(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor				

<p>相手国側代表者 氏名・所属・職</p>	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer</p>
<p>29年度の研究 交流活動</p>	<p>本研究には、タンザニア協力機関(ムヒンビリ国立病院)に赴任している日本側研究者が携わる。28年度までに赴任先で行ったベース調査によって、低出生体重児が多く入院しているムヒンビリ国立病院の新生児病棟において、母乳ケアの指導がされることが少なく、同室の母親同士が教え合いをしていたり、退院時指導も約半数の母親が受けないまま退院している。もしくは、退院指導を受けていたとしても、その指導方法は看護師間で統一されておらず、退院後の外来受診にて、「母乳が出ない」という相談が多いことに繋がっていると考えられた。WHOが推奨している生後6ヵ月までの完全母乳育児の継続は困難な状態であり、結果、児が母乳に含まれる十分な栄養と免疫成分が得られないことで、下痢、肺炎、発達遅延などのリスクに曝され、最悪死に至る危険がある。そのため、低出生体重児の母親が入院時/退院時に看護師から母乳ケアに関してどのような指導を受けているのか、その影響は子どもの成長に関連があるのか、また自宅に帰ってから母乳ケアを困難にしている要因はあるのかの記述的調査を計画・実施した。倫理審査を通過したのち、新生児病棟とカンガルーケア病棟で、作成した質問紙、インタビューガイドを用いたデータ収集、分析を実施した。</p>
<p>29年度の研究 交流活動から得 られた成果</p>	<p>① 看護師の教育は、量的にも質的にも不十分であることが分かった。具体的には、初回授乳時に教育を受けた母親は参加者の半分であり、他の母親は、「壁のポスター」、「他人の真似」、「今までの経験」から授乳を実施していた。母親が帰宅後も、不自由なく母乳育児を継続することができるように入院中・退院時に行われることが求められる教育内容も、看護師に寄って偏りが見られた。教育があったとしても、内容・方法は標準化されておらず、母親が十分に理解していないまま退院していることが示唆された。</p> <p>② 退院後、完全母乳育児を継続できた理由、継続できなかった理由が記述された。継続できた直接的な理由は、「強い母子愛着形成」や「医療従事者のアドバイスへの強い信頼とコミットメント」等が挙げられた。継続できなかった理由は、「乳頭/乳房トラブル」、「子どもの哺乳力不足」等が挙げられた。その他にも、母親の知識不足、母乳不足感、授乳への消極的姿勢、伝統的信念等が客観的理由として挙げられた。</p> <p>③ 母親の母乳育児に対する知識、それに伴う退院後の自宅での母乳育児行動の関連性が示唆された。具体的には、完全母乳育児中に、水やハチミツを与えても良いと思っている人は、自宅でも水やハチミツを与えてしまう事実があった。</p> <p>④ 看護師が病棟で指導すべき最も適切な指導方法が示唆された。具体的</p>

	<p>には、完全母乳育児の教育をする際は、生後6ヵ月まで母乳のみを与えるということだけでなく、「母乳のみ」とは、水やハチミツ等も禁止であること、及び完全母乳育児をしないリスクを強調する必要がある。その他にも、早期授乳支援、授乳方法（回数・量・ポジショニング等）、母乳量を増やす方法、搾乳方法、伝統的な信念に対する別の考え方について、等が挙げられた。</p>
--	--

整理番号	R-7	研究開始年度	平成29年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	<p>(和文) タンザニア農村部の妊婦健診における、看護師とのコミュニケーション向上を目的とした妊婦グループプログラムの開発と評価</p> <p>(英文) Feasibility Study of Group Meeting for Empowering Women to Communicate at Antenatal Care in rural Tanzania</p>				
日本側代表者 氏名・所属・職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer</p>				
29年度の研究 交流活動	<p>R-1で28年度までに実施した看護師・助産師を対象とした妊婦健診での出産準備教育カウンセリングの技術の向上に関する教育プログラムの実施と評価を通し、助産師のカウンセリング技術の知識と技術の向上を認めることができた。この先助産師のカウンセリングの効果を高めるためには、妊婦健診の場で、妊婦が自身の健康状況や出産準備に対する状況を語ることをサポートする必要性が示された。その為、R-7として新たに「タンザニア農村部の妊婦健診における、看護師とのコミュニケーション向上を目的とした妊婦グループプログラムの開発と評価」を計画、実施した。</p>				

<p>29年度の研究 交流活動から得 られた成果</p>	<p>① タンザニア側カウンターパートとの共同した調査にて、タンザニア農村部の病院での妊婦健診で、妊婦と看護師の1対1のコミュニケーションにおいて、看護師から妊婦への健康教育を実施しているが、妊婦の声を看護師に伝える場が不足しているという現状が示された。</p> <p>② 妊婦グループプログラムをタンザニア側カウンターパートと共に開発・実施した。本プログラムを評価することで、妊婦と看護師の1対1でコミュニケーションと比較して、妊婦グループ介入への効果を提示する。</p> <p>③ 妊婦健診の待ち時間を使用した、妊婦グループプログラム（妊婦5人とファシリテーターとしてタンザニア側カウンターパートである看護師1人で構成される）の実行可能性が評価された。</p>
--------------------------------------	--

## 7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「タンザニアにおける早期必須新生児ケアセミナー」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Early Essential Newborn Care Seminar in Tanzania”
開催期間	平成 29 年 7 月 31 日 ~ 平成 29 年 8 月 2 日 (3 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) タンザニア、ダルエスサラーム、ムヒンビリ国立病院 (英文) Tanzania, Dar es Salaam, Muhimbili National Hospital
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授 (英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外で開催の場合)	(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences School of Nursing, Senior Lecturer

### 参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (タンザニア)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	4 / 12	
	B.	9	
タンザニア 〈人／人日〉	A.	2 / 6	
	B.	20	
合計 〈人／人日〉	A.	6 / 18	
	B.	29	

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	28 年度に実施した日本学術振興会研究拠点形成事業「世界保健機関/三国共同セミナー早期必須新生児ケア(Early Essential Newborn Care (EENC))」において、タンザニア側の EENC ファシリテーターが育成された。29 年度はそのファシリテーターを中心に、タンザニアで実践に携わる助産師に教育セミナーを実施し、新生児ケアを改善する。その改善プロセスは R-4 と連動させ、研究としても成果を示す。	
セミナーの成果	<p>① タンザニアの助産師・医師・看護教員を含む 11 名に、エビデンスに基づいた新生児ケアを、コーチングの手法を用いて伝える、知識テストが参加者平均 8 点から 13.5 点に上昇し、実技チェックは最終的に全員が基準である 90%を越えた。</p> <p>② タンザニア側研究者 2 名、日本側研究者 1 名がファシリテーターとして現場の助産師を教える機会を持った。</p> <p>③ 日本側若手研究者 2 名が、WHO との共同セミナーをタンザニアへ展開する機会を持ち、タンザニアの新生児ケアを改善するために協働が必要である保健省や WHO カントリーオフィス、在タンザニア日本大使館、国際協力機構 (JICA) について学ぶことができた。うち在タンザニア日本吉田雅治大使、JICA タンザニア事務所長瀬俊夫所長が開講式に参加した。</p> <p>④ タンザニア側研究者 2 名と今後の展開について相談する機会を持ち、日本助産師会を協働に加えた助産師教育の可能性について話し合った。</p>	
セミナーの運営組織	聖路加国際大学参加研究員、事務局 ムヒンビリ健康科学大学事務局	
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容 外国旅費、備品・消耗品購入費、その他経費 経費合計：1,680,219 円 (うち消費税相当額：115,587 円)
	タンザニア側	内容 タンザニア国内旅費

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「インドネシアにおける早期必須新生児ケアセミナー」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Early Essential Newborn Care Seminar in Indonesia“
開催期間	平成 29 年 10 月 23 日 ~ 平成 29 年 10 月 25 日 (3 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) インドネシア、ジャカルタ、国立イスラム大学 (英文) Indonesia, Jakarta, Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授 (英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke’s International University, Graduate School of Nursing Science, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Yenita AGUS, Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah, Lecturer

#### 参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (インドネシア)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	4 / 24
	B.	
インドネシア 〈人／人日〉	A.	3 / 9
	B.	16
合計 〈人／人日〉	A.	7 / 33
	B.	16

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	28 年度に実施した日本学術振興会研究拠点形成事業「世界保健機関/三国共同セミナー早期必須新生児ケア(Early Essential Newborn Care (EENC))では、インドネシア側の EENC ファシリテーターも育成された。28 年度 S-3 では、R-3 で示されたニーズに基づき、EENC に含まれる早期母子接触のセミナーを実施し、インドネシアで行う教育セミナーの課題も抽出した(例、言語の壁の問題)。29 年度はその課題を克服する形で、インドネシアで EENC のプログラムを実践に携わる助産師に実施し、新生児ケアを改善する。	
セミナーの成果	<ul style="list-style-type: none"> <li>① エビデンスに基づいた新生児ケアを、インドネシアで実践に携わる看護師にコーチングの手法を用いて伝えることができる。</li> <li>② インドネシア側研究者がファシリテーターとして現場の看護師・助産師を教える機会を持つ。</li> <li>③ 日本側若手研究者が、文化の異なるインドネシアの新生児ケアの現状を理解し、現場の看護師が求めている知識や技術を探索し、改善するために必要な援助機関との教育や協働について学ぶことができる。</li> <li>④ 2年連続して、セミナーを開催し、言語の問題を解決するための事前準備、教育開催の環境、物品や教材リソース、人的リソース、事後の成果の共有が、いかに重要なプロセスであるかを知り得た。</li> <li>⑤ 免許獲得後のインドネシアの看護師・助産師の学習ニーズ、技術演習に対する興味や関心、シミュレーション教育の展開方法と評価についての知見が得られた。これらを研究成果として情報発信することが次世代の人材育成教育に繋がる。</li> </ul>	
セミナーの運営組織	<p>聖路加国際大学参加研究員、事務局  国立イスラム大学 看護学部事務局</p>	
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容 外国旅費、備品・消耗品購入費、謝金、その他経費 経費合計：890,301 円（うち消費税相当額：62,288 円）
	インドネシア側	内容 会場提供

整理番号	S-3
セミナー開催の目的	平成 29 年 7 月に研究者交流として日本側参加研究者のタンザニア渡航を予定している。また、10 月には、長期派遣されていた大学院生も帰国する。その成果を広く日本の助産学生、助産師、その他国際保健に興味のある一般市民に報告することを目的とする。
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「タンザニアでの研修報告 2017」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Report about experiences in Tanzania 2017“
開催期間	平成 28 年 11 月 14 日 (1 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、東京、聖路加国際大学 (英文) Japan, Tokyo, St. Luke’s International University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授 (英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke’s International University, Graduate School of Nursing Science, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) なし

#### 参加者数

派遣元	派遣先	セミナー開催国 ( 日本 )	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	17	17
	B.	17	
合計 〈人／人日〉	A.	17	17
	B.	17	

A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)

B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナーの成果	<p>① 一般参加者として 17 名の看護教員、看護・助産学生、助産師、その他国際保健に興味のある一般市民が、日本人研究者から見たタンザニアの現状について、また本事業で実施している活動について理解を深めた。</p> <p>② 28 年度参加した研究者、また 29 年度新たに参加した研究者を含め、日本の助産学生、助産師、その他国際保健に興味のある一般市民と参加研究者の意見交換の機会となり、より多角的な視点や今後の研究交流事業をより効果的なものとする意見を出し合った。特に参加者よりタンザニアの看護の中での管理の概念について質問があり、議論が深まった。</p> <p>③ セミナーの実施により、12 名の大学院生を含めた参加研究者の発表の機会となり、直接タンザニア渡航をしていない研究者にも、国際交流の成果を伝えることで、研究者間の相互理解と信頼関係が深まった。</p>	
セミナーの運営組織	聖路加国際大学参加研究員、事務局	
開催経費 分担内容 と金額	日本側	内容 その他経費 経費合計：33,240 円

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外でどのような交流（日本国内の交流を含む）を行ったか記入してください。

日数	派遣研究者		訪問先・内容		
	氏名・所属・職名		氏名・所属・職名		内容
2 日間	新福 洋	聖路加国際大学・助教			国際保健医療学会東日本地方会での国内交流
10 日間	新福 洋	聖路加国際大学・助教	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	由利 紗織	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	中川 理恵	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	轡田 みと	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	野田 ひろ	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	渡辺 由佳	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	濱津 いよ	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	渡辺 采那	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	浅倉 美貴	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	小島 悠美	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	荒井 麻友	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	山田 路	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	張 俊華	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	大橋 明	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
10 日間	笹山 桐	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
5 日間	長松 康	聖路加国際大学・准教授	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
3 日間	五十嵐 由	聖路加国際大学・博士前期課程	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
5 日間	新福 洋	聖路加国際大学・助教			WHO Early Essential Newborn Care会議の参加、S-1成果報告
11 日間	新福 洋	聖路加国際大学・助教	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	R-4, 5, 6, 7の調整、スーパーバージョン
10 日間	新福 洋	聖路加国際大学・助教	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流
7 日間	新福 洋	聖路加国際大学・助教	LESHABARI/SeabIda	Muhimbili University of Health and Allied Sciences・Dean	ムヒンビリ健康科学大学研究者、大学院生との交流

7-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

(※B. アジア・アフリカ学術基盤形成型は記載不要)

## 8. 平成29年度研究交流実績総人数・人日数

### 8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本	タンザニア	インドネシア	ベトナム (第三国)	合計
日本	1		3/ 25 ( 0/0 )	( )	( )	3/ 25 ( 0/0 )
	2		26/ 524 ( 0/0 )	( )	1/ 5 ( 0/0 )	27/ 529 ( 0/0 )
	3		3/ 54 ( 0/0 )	4/ 24 ( 0/0 )	( )	7/ 78 ( 0/0 )
	4		2/ 79 ( )	( )	( )	2/ 79 ( 0/0 )
	計		34/ 682 ( 0/0 )	4/ 24 ( 0/0 )	1/ 5 ( 0/0 )	39/ 711 ( 0/0 )
タンザニア	1	( )		( )	( )	0/ 0 ( 0/0 )
	2	( )		( )	( )	0/ 0 ( 0/0 )
	3	( )		( )	( )	0/ 0 ( 0/0 )
	4	( )		( )	( )	0/ 0 ( 0/0 )
	計	0/ 0 ( 0/0 )		0/ 0 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )
インドネシア	1	( )	( )		( )	0/ 0 ( 0/0 )
	2	( )	( )		( )	0/ 0 ( 0/0 )
	3	( )	( )		( )	0/ 0 ( 0/0 )
	4	( )	( )		( )	0/ 0 ( 0/0 )
	計	0/ 0 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )		0/ 0 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )
	1	( )	( )	( )		0/ 0 ( 0/0 )
	2	( )	( )	( )		0/ 0 ( 0/0 )
	3	( )	( )	( )		0/ 0 ( 0/0 )
	4	( )	( )	( )		0/ 0 ( 0/0 )
	計	0/ 0 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )		0/ 0 ( 0/0 )
合計	1	0/ 0 ( 0/0 )	3/ 25 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	3/ 25 ( 0/0 )
	2	0/ 0 ( 0/0 )	26/ 524 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	1/ 5 ( 0/0 )	27/ 529 ( 0/0 )
	3	0/ 0 ( 0/0 )	3/ 54 ( 0/0 )	4/ 24 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	7/ 78 ( 0/0 )
	4	0/ 0 ( 0/0 )	2/ 79 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	2/ 79 ( 0/0 )
	計	0/ 0 ( 0/0 )	34/ 682 ( 0/0 )	4/ 24 ( 0/0 )	1/ 5 ( 0/0 )	39/ 711 ( 0/0 )

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

### 8-2 国内での交流実績

	1	2	3	4	合計
	1/ 2 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	0/ 0 ( 0/0 )	1/ 2 ( 0/0 )

## 9. 平成29年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	47,250	
	外国旅費	3,493,542	
	謝金	622,067	
	備品・消耗品 購入費	202,580	
	その他の経費	2,032,187	
	不課税取引・ 非課税取引に 係る消費税	402,374	不可税取引: 402,374 非課税取 引:0
	計	6,800,000	
業務委託手数料		680,000	
合 計		7,480,000	

## 10. 平成29年度相手国マッチングファンド使用額

該当なし

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。